## 33 『鍼灸阿是要穴』について

宮川隆弘

岡本一抱子著『鍼灸阿是要穴』五巻（元禄十六年刊行）は江戸時代中期に成立した鍼灸奇穴に関する鍼灸書である。巻之一から巻之五前半までは、一六五穴余りの奇穴について解説し、巻之五の半ばより末尾までは、本書執筆当時、鍼灸について巷間で言い伝えられていた事柄とそれに関する著者の見解が述べられている。

本書の冒頭では、「阿是を弁ず」と題して、先ず『千金方』の有名な阿是穴についての一節を引用し、「其の阿是と言うは、若し何の処にても病痛あることを覚えば、即ち其の苦しむ処の体上を捏推して、若し裏その病処に適当せば何れの経、何れの兪穴たるの分かちなく、只其推して快く応る処を以て阿是と号て、即ち灸し、即ち鍼するに皆よく験あることを致すなり。故に此れを名けて阿是と云うなり。蓋し身体の中いずこにても阿く推て是き処を以て灸刺するが故に阿是と云う者なり。」と定義づけを行い、次に阿是についての考証を行っている。それによれば、〈中国歴代鍼灸書掲載の三六五穴以外の四花穴、風市穴などの奇兪穴も阿是の中より出たものである〉、〈『素問』『霊枢』には奇兪及び阿是の名も見られなく、阿是という名は『千金方』にはじめて掲載されたものである〉、〈『霊枢』経筋篇の「以痛為輸」とは「推して裏に応へて快く痛む処を以て穴とする義なり〉と解説し、馬玄臺注本に見える「天應穴」も阿是のカテゴリーに入るものであるとしている。更に〈輸穴は本来経絡に繋がるものであり、奇輸、阿是といえども経絡を外れる道理はないものである〉として、〈後人は奇輸あるところの経絡を推測しどの経、どの絡に属しているのか、何が本穴に当たるが故に主治のような効果があるのかを追及しなければならない〉と述べている。また四花穴についての明代鍼灸家・高武の学説を例に挙げて、〈どの奇輸も皆高武のようにその所属する経絡及びその穴の本質を明らかにしなければ鍼灸の効果がどうして現れるだろうか〉と主張している。そして以上の点を踏ま

えて〈医書の中で最も重要であると考えられる奇輸を列記し、『鍼灸阿是要穴』と名付けて初学者の指南とした〉と結んでいる。

奇輸それぞれの解説においては出典、取穴法、主治の表記と徹底した考証を行っている。その一例を挙げれば、四花穴の考証は頗る詳細で、約十二丁にわたって述べられ、取穴の便法を考究するに留まらず、主治及び類似した穴法についても言及されている。引用書並びに引用回数は、『類経図翼』三五、『千金翼方』三三、『千金要方』二三、『神応経』二一、『医学入門』一四、『黄帝明堂灸経』九、未詳（俗伝など）七、『鍼灸聚英』六、『玉龍賦』三、『素問』王冰注二、『玉機微義』、『十薬神書』、『鍼灸資生経』、『扁鵲鍼経』が各一となっている。本書で援用されている多くの医書、鍼灸書は、江戸前期から中期にかけて、和刻重刊され広く流布していたものばかりであり、当時の鍼灸家における知識の源泉を示す資料ともなっている。

本書は江戸時代中期における経外奇穴の先駆的な解説書であるのみならず、冒頭や巻四の末尾などに述べられた阿是の解釈にも独特な見解を持つことから、筆者の鍼灸学術思想を浮き彫りにしたものであると考えられる。

（日本鍼灸研究会）